

第1章 ボランティア観の今日性と研究課題

—ボランティア活動の揺らぎとジレンマに着目して—

本章では、ボランティア研究の今日的課題という観点から、ボランティアコーディネーションにおけるチャレンジドケース（困難事例）という本研究の課題を改めて確認してみようと思う。一つは、ボランティア活動の実態と理解に関する揺らぎとジレンマというテーマである。ボランティア活動に生じている揺らぎやジレンマを余すところ無くリアルに把握しきること、これが第一の課題である。これと関連するが、二つ目の課題とは社会のボランティア観の今日性という課題である。ボランティア活動の実体化は、ボランティアイメージを収束ではなく一気に拡張させてきたし、そのことがボランティア理解を揺るがせ、ジレンマを抱え込ませる結果ともなっている。ボランティア活動がいまや理念型で語られる時代ではなく、実体論として議論される時となったが故に、ボランティア活動をいかなる手法でもって把握するのか。どのようなものとして理解するのか。そのことが逆に市民のボランティア活動への参加促進にどう影響し実体化するのか、ということが問われるのである。第三には、ボランティア活動に生じている揺らぎとジレンマあるいはイメージや実態の拡張という状況を通して、ボランティア活動の性格や発揮する機能をどのようなものとして捉えることが可能か、このことはボランティア活動の前進や進化に貢献しうるものであるのか、といういわばボランティア活動に関する理論のフレームワークの課題である。本研究では、チャレンジドケース（困難事例）を臨床場面としながら、揺らぎとジレンマあるいはボランティアイメージの拡張といった困難性の発生因子を、ボランティアとは無縁のネガティブな指標とみなしてボランティア活動に関する理論から排除・除去するのではなく、逆にこれらの因子を積極的に取り込んだ理論枠組みを提起することが可能かどうかを一つの論点にしている。以下それぞれ

れの課題を概観してみる。

1. ボランティア活動の揺らぎとジレンマ—その理解と実態—

「ボラバイト」を紹介する若者向けサイトがある¹⁾。ボラバイトとは、ボランティアとアルバイトを結びつけた造語だが、「有償ボランティア」とか「フリーター」などとはいわない。ボラバイトする人をボラバイターといい、そのサイトにはボラバイト情報のメールマガジンも登場し、全国各地からの「求人・求職」を紹介している。福祉施設などでの介護体験はもちろんだが、仕事に集中する繁忙期の農作業や民宿、ペンションなどの紹介も多い。むしろメールマガジンにはこの種の情報のほうが主のようである。「バイト料」はあるのだが、若者たちは額よりその中身に惹かれて応募する、というのだ。報酬額より体験重視、というのだ。やりたい仕事探し、自分探しの途上にこうしたボラバイトが重なるのだらう²⁾。

ボラバイトはボランティア理解と実態の揺らぎを示す一例であるが、長きにわたって説明されてきた「自発性」「無償性」「公共性」といったボランティア原則に大きな揺らぎが生じているようである³⁾。

ボランティア活動への参加の動機やそのきっかけは、友人に誘われた、学校での授業で興味を持った、会社でボランティア休暇が制度化された、趣味を活かしたい、等等ときっかけの多様化の兆しは随分と以前から指摘されてきた。自発性の原則で言えば、活動開始の前提的なものではなくむしろむしろ活動の中で芽生えていくもの、育まれていくものという理解が広がっている。ボランティア活動における自発性とは学習課題とも言うべきものであって、この理解に立てば、教育や企業でのボランティア教育プログラムや支援プログラムには、強制という否定的側面だけでなく、自発性発揮のための支援や働きかけという積極的機能が包含されていることになり、支持される。

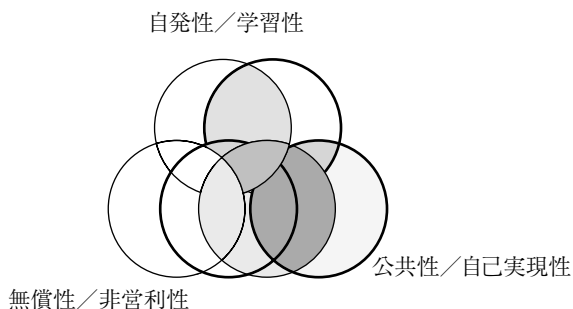
無償性原則もまた冒頭のボラバイトに見るように、有償か無償か、ということがもはやボランティアか否かの分岐点に座するという事態ではなくなっている。実際のボランティア活動場面では、活動に伴う費用負担に耐えかねて

ボランティア参加に二の足を踏み、結果として、かつてよく言われてきたようなボランティア活動は時間と労力だけでなくそして経済的にも恵まれたものだけが参加する社会活動というイメージを改めて確認させる結果となっている。いつでもどこでもだれでも気持ちがあれば参加できるボランティア活動環境とは、活動の対価としての賃金を要求することも営利を追求するものでも決してないが、活動に伴って発生する交通費や雑費など個人的な支出を生まなような経済的支援の必要は大方の合意を得ているようである。無償性原則もまた、非営利性という強力なアンチテーゼに出くわしている。

公共性の原則はどうであろうか。公共性の原則とは、ボランティア活動が活動家の独り善がりのものであってはならず、多くの市民や社会の福祉向上に貢献するという含意であるが、独り善がり排除は、当然としても自己実現としてのボランティア活動はいまや社会の前面に押し出されている。独り善がり自己実現との困難極まる概念上の線引きにも拘らず、ボランティア活動への参加で豊かな人生を、というスローガンはボランティア政策の支柱に躍り出ている。ボランティアの公共性が強制や動員、義務の色彩を持って語られたり強調されればされるほど、ボランティア活動の自己実現性のウイングはますます大きく広がっていくという構図である。

こうして、図1に見るように、ボランティアとその活動に関する今日的な理解や実態は（ボランティア観）は、従来からの「自発性」という主体態度は「学習」可能なものとして、「無償性」という価値形態は非営利性、「公共

図1 ボランティア理解と実態の多様化



性」という活動効果は自己実現との緊張関係に曝されることとなったのである。「学習性」「非営利性」「自己実現性」という強力な対抗馬の出現によって、伝統的なボランティア原則は地殻変動を起こしているといえよう。新旧のボランティア理解が完全に分離も重複もせずに、一部重なり合いながらその分離重複の関係をさらに行き来しているような「乱視」的な不安定な状況を作り出しているのである。ボランティア活動をして「あいまい」⁴⁾な活動であり、定義化が最も困難な社会活動のひとつというネガティブ評価もこうした今日の環境が引き起こしている結果なのである。

しかし、こうした揺らぎ状況は、ボランティア環境を単に不安定にし、貧しくするという大方の評価に対抗して、逆に、揺らぎこそが、従来のボランティア理解と実態を刷新し、ボランティアとその活動の豊かな未来を切り開く可能性に充ちた原動力であり、ボランティアキャパシティの広がり力なのではないか、という評価は成り立たないだろうか。揺らぎ発生を否定的に不安視する思考形式は、多分にボランティアを規定する様々な要因要素をポジティブ・ネガティブ、強み弱み、メリット・デメリットなど二項対立の二分法的な分析評価の対象としてきたことに起因するようである。本研究におけるボランティア研究では、こうした二分法的手法は採用していない。むしろ、従来の分析手法では、肯定と否定の双方に引き裂かれ、「ポジティブ・ネガティブ」、「強み・弱み」⁵⁾、「メリット・デメリット」等々として把握された要因要素の全てを、ボランティア実態とその理解の拡張可能性要素として捉え、新たな安定化へ向う秩序形成の原動力という「ひとつながり（グラディエーション）」ものとして積極的に分析対象にし、理論枠組みの中に取り込んでいこうというものである。

2. ボランティア観の今日性—「イメージ」と「強み・弱み」—

また、本研究では、チャレンジドケースの発生には、「ポジティブ・ネガティブ」「強み・弱み」「メリット・デメリット」「好感・嫌悪」等々といった対を成すようなボランティアイメージの両義性も大きく影響していること

から、ボランティア観の今日性についても検討してきた。既に指摘してきたように、本研究はこの「ポジティブ・ネガティブ」「強み・弱み」「メリット・デメリット」「好感・嫌悪」等々といったボランティアとその活動の持つ両義性を、「ひとつながり（グラディエーション）」ものとして、ボランティアとその活動の理論枠組みに積極的に取り込んでいくことに主要な関心があるのであって、これらイメージ指標をボランティアと非（反）ボランティアという定義づけの指標とにしようというものではない。

本研究ではボランティア活動に現われる「強み・弱み」を指標とすることで、ボランティアイメージの両義性にアプローチしているが、この課題と関連しては、既に「ネガティブ・ポジティブイメージ」を指標とする優れた研究もあるので、その研究成果に依拠しつつ、私たちの研究の概略を報告してみる。

1) ボランティアイメージ―「ポジティブ」と「ネガティブ」―

この研究では小澤亘の研究が参考になる⁶⁾。小澤は、ボランティアイメージとボランティア活動への参加との相関関係を、日本・韓国・カナダの3カ国の比較調査研究を元に詳細な検証を行っている⁷⁾。

ボランティアイメージ項目として取り上げられているものは、「自己犠牲」「偽善的な」「困った人を助ける」「人気のある」「強制的な」「お金では得られない」「冒険的な」「知識や経験が社会に生きる」「楽しい」「おせっかいな」「自分が成長する」「まじめな」「恥ずかしい」「遊び感覚」「時間に余裕のある人がする」という15項目である。

表1は、小澤によって整理されたボランティアイメージとボランティア関心の相関係数であるが、マイナスの数値が大きければ大きいほどボランティア関心は低下し、逆にプラスの数値が大きければ大きいほどその関心は高まる、という相関関係である。表の数値が絶対値の1に近ければ近いほど、傾向性からのはずれが少なく、相関度が高い、ということである。小澤は、ボランティア関心との間で、正の相関関係にあるイメージ項目をポジティブイメージ、負の関係にあるものをネガティブイメージと呼ぶ。こうしたイメー

ジ類型を、日本データと韓国データで比較検討した結果を下記のように結論付けている。

- ①「まじめな」「困った人を助ける」というイメージは、日本データでは、ボランティア関心にプラスの影響を与える要因とはなっていない（統計的に有意な相関関係が見られない）が、韓国データでは、二つともポジティブイメージで、ボランティア関心を増大させる要因となっている。
- ②「自己犠牲」「偽善的な」というイメージは、日本データでは、ボランティア関心を減退させるネガティブイメージであるが、韓国データの場合、ボランティア関心に影響を与える要因とはなっていない。

表1 ボランティアイメージと関心の相関係数

イメージ項目	日本データ	韓国データ
自己犠牲	-0.226**	－
偽善的な	-0.292**	－
困った人を助ける	－	0.145*
人気のある	0.163**	0.171**
強制的な	-0.161**	-0.089
お金では得られない	0.261**	0.184*
冒険的な	0.190**	0.182**
知識や経験が社会に生きる	0.338**	0.245**
楽しい	0.441**	0.320**
おせっかいな	-0.139**	-0.237**
自分が成長する	0.402**	0.210**
まじめな	－	0.162**
恥ずかしい	-0.208**	-0.094
遊び感覚	－	－
時間に余裕のある人がする	-0.168**	-0.221**

(小澤亘『ボランティアの文化社会学』p.220)

ボランティアイメージといえるものが、ボランティア活動への関心を促進させたり衰弱させたりというポジティブあるいはネガティブのどちらに機能

するかは、その文化環境の違いによって、相互に位置交換が可能なものであること、という結論である。「困った人を助ける」というイメージは韓国ではプラスに働くが日本では影響していない、「自己犠牲」イメージは日本ではマイナスに働くが、逆に韓国では影響しない、ということである。さらに、小澤は、それぞれのイメージを規定している要因因子として、「向上」「援助」「面白」「外圧」「羞恥」「偽善」の6因子をあげ、そのまとまりの型によって各国ボランティア文化を特徴づける試みを行っている⁸⁾。「遊び感覚」などの「面白」因子についてはポジティブ因子とネガティブ因子の双方を備えたものとして分析対象としている。この小澤の研究と結論は、ボランティアとその活動の両義性を「ひとつながり（グラディエーション）」によって把握可能とする理論枠組みを構築していくという私たちの研究方向とも一致するものといえよう。

2) ボランティア観の今日性—強みと弱みの構造分析から—

私たちは、ボランティア理解や実態の多様化を図る具体的な指標の豊富化という観点から、こうしたボランティアイメージを規定する因子を、筆者が担当するボランティア教育プログラム受講者によって記されたボランティア活動の強みと弱みシートの内容から特定するという分析作業を行ってきた。

集約されたシートは以下の教育プログラムの受講者によって記された。

- ①2002年度同志社大学基礎科目「ボランティア活動論」（前期毎土曜1・2時間目、受講生約150人）
- ②2003年度立命館大学大学コンソーシアム京都提供科目（夏季集中、定員180人）
- ③2003年度日本医療生協連合会ボランティアコーディネーター養成講座（受講生約100人）
- ④2004年度立命館大学大学コンソーシアム京都提供科目（夏季集中、定員180人）
- ⑤2005年度立命館大学大学コンソーシアム京都提供科目（夏季集中、定員180人）

⑥2006年度立命館大学大学コンソーシアム京都提供科目（夏季集中、定員180人）

これらの1千人近いプログラム受講者のうち、6割程度の受講生がシートに記入した。回収された強み弱みシートは数百枚に上っているが、2006年度にこのシートに記入された強み項目、弱み項目は、それぞれ237個、208個と計445個という膨大な数となった。筆者らの『ボランティアコーディネーションにおけるチャレンジドケース臨床研究』（平成16～18年度科学研究費補助金研究成果報告書、課題番号16330110）の巻末「資料3」に2006年度の教育プログラム⑥の受講生から採集した強み弱みシートに記された項目一覧表を資料として掲載しているが、私たちは引き続き、この項目集約と分析を続けていくことを計画しているが、ここではその研究枠組みについて紹介しておく。

表2は、「強み・弱み×自己・他者・活動」という6象限に想定されるイメージ因子を例示したものである。縦軸の強みと弱みの因子は、ボランティア活動のメリット・デメリットやポジティブ・ネガティブイメージ、損・得、長所・短所、など各自がボランティア活動に関して直接・間接に感じ取っている感覚・感情・体験・経験・知識などを、記入するよう指示したものである。また、横軸には、こうした強み弱みのベクトルがいずれの方向を向いたものとなっているかを、それぞれ自己・他者・活動（そのもの）という3因子に分類した。採取された自己・他者・活動の因子には各因子が複合化して現われると思われるものも散見されたが、極力この3因子に分類している。

i. 自己因子

自己因子とは、内容や関心、問い掛けが自分自身に向いているものをいう。ボランティア活動が自分自身にとって、どのような影響をもたらし成長の糧になるのかということを主題にしている内容である。具体的には、強み因子には、自己実現、達成感、スキルアップ、向上、自信、責任感、就職進学の役に立つ、視野が広がる、自由意志で出来る、やりがい、新しい発見、などが集まり、弱み因子には、お金が無い（かかる）、お金にならない、時間が

取られる、知識が無い（必要）、気軽に出来ない、責任がもてない、見返りが無い、自腹を切る時もある、報酬が無い、自己満足、等々という単語やフレーズとして表現されてきた。ボランティア活動とは、得るものも多いが、犠牲にするものも少なくない行為であるということであろう。

ii. 他者因子

また、他者因子とは、内容や関心、問い掛けが他者に向き、他者の判断や態度、評価に依拠している。ボランティア活動が他者にどのように映っているか、他者にどう影響し、また他者とどのような関係を築いているかということを中心としたものであり、具体的な言葉やフレーズは以下ようになった。強みとしては、感謝される、喜ばれる、役に立つ、貢献、人助け、評価される、連帯できる、出会い、友達ができる、などがあり、逆に弱みとしては、偽善的、恥ずかしい、いい人っぽい、理解が無い、認識不足、認知度が低い、人間関係で悩む、ニーズが過剰になる、利用主義的な人、断れない、などの言葉やフレーズとなった。こうしてみると、他者との関係での強みは対面的な行為の中につくられ、逆に弱みは匿名的な関係として認識されているようである。今後の分析テーマである。他者との関係を豊富化し新たな親密圏の形成や自己／他者評価の構築にも影響する自発的な行為であるが、逆にそのことによって人間関係や社会的評価に関するより深い悩みや軋轢、摩擦を生じかねない行為であるということである。

iii. 活動因子

そして活動因子とは、そのベクトルが自己や他者というよりもボランティア活動そのものの価値や理念、実態に関心や興味が向いているものであり、そもそもボランティア活動って何、ということを主題にしているものである。ボランティア活動そのものが持っている強みとは、面白い、楽しい、自由、無限、可能性、政府より対応が早い、誰でも参加できる、臨機応変、柔軟、などがあり、弱みとしては、不公平、限界がある、非効率、強制力がない、人が集まりにくい、効果は一部だけ、権限が無い、継続性がない、資金難、

表2 ボランティア観の因子6象限の項目例示

因子	自己因子 内容や関心、問い掛けが、ボランティアの活動者である自分自身に向いている。ボランティア活動が活動者自身にとって何かということをも主題にしている内容。	活動因子 ボランティア活動そのものの価値や理念、実態に関心や興味が向いている。ボランティア活動とは如何なるものか、ということをも主題にした内容。	他者因子 内容や関心、問い掛けが他者に向き、他者の判断や態度、評価に依拠している。ボランティア活動が他者にどのように映っているか、他者にどう影響しているかということをも主題にした内容。
強み因子	① 自己実現 達成感 スキルアップ 責任感 就職進学の役に立つ 視野が広がる 自由意志で出来る やりがい 新しい発見 等々	③ 面白い 楽しい 自由 無限 可能性 政府より対応が早い 誰でも参加できる 臨機応変 柔軟 等々	② 感謝される 喜ばれる 役に立つ 貢献 人助け 評価される 連帯できる 出会い 友達ができる 等々
弱み因子	④ お金が無い(かかる) お金にならない 時間が取られる 知識が無い(必要) 気軽に出来ない 責任がもてない 見返りが無い 自腹を切る時もある 報酬が無い 自己満足 等々	⑥ 不公平 限界がある 非効率 強制力がない 人が集まりにくい 効果は一部だけ 権限が無い 継続性がない 資金難 素人 等々	⑤ 偽善的 恥ずかしい いい人っぽい 理解が無い 認識不足 認知度が低い 人間関係で悩む ニーズが過剰になる 断れない おせっかい 等々

素人、等となった。ボランティアの活動とは、その環境や背景、場面、など活動を構成する諸要素の組み合わせによっては、その長所が短所に、メリットがデメリットに、利益が損失に、様々に位置交換するような複雑性に満ちた活動である、ということであろう。こうした揺らぎやジレンマとして現われる両義性に今日のボランティア活動の特徴が示されているようである。

iv. 小括

こうした「強み・弱み」×「自己・活動・他者」という6象限による分類には、例えば、自己因子の強みとして分類した「面白い」「楽しい」という因子は、むしろボランティア活動は「面白い」「楽しい」と思う自己に向う活動因子ではないかという説も成り立つ。このように各象限に記したものは相互に共有される因子も少なくないが、前述したようにここではこの6象限の固有性を強調する意味もあって極力単純化して分類している。

また、本稿で例示している因子の多くは、因子を記した受講生の多くが、自らの立場性としてボランティア活動を「される側」ではなく「する側」に想定しているものが多数を占める学生が中心であることから、結果として「する側」の視点という、単眼の視点からの分類に終わっているかもしれない。今後、ボランティア利用者から「される側」としてのボランティアの強み弱み因子の集約が進めば、両サイドからの分類化とその比較検討によってさらに詳細な比較研究、分析検討が可能となるであろう⁹⁾。ボランティア活動を「する側」「される側」としてのこうした試みは、ボランティア活動の両義性として具体的に把握される強みと弱みの分類研究の課題であり、活動因子を媒介にしながら自己因子と他者因子が相互に作用している両義性の実態をつぶさに把握しようという試みである。そして、ボランティア活動が備えているこのような両義性こそが、ボランティアチャレンジドケースの形成に影響する重要な要因となっているのではないか、という仮説を設定しながら、その検証作業を試みている途上である。

強みから弱みまで、あるいはポジティブからネガティブまで、その両義性を色濃く反映したボランティア観の今日性に関わっての研究であるが、その第1歩が本研究第2章以下で詳述しているチャレンジドケースの研究である。

【注】

1) 「SANKANET」 <http://www.sankanet.co.jp/>

「ボラバイト」 <http://mobile.volubeit.com/>

「Netボラバイト」 <http://www.mtagri.com/html/volubeit/volubeit.html>

- 2) 「『ボラバイト』とはボランティアとアルバイトを合わせた造語で、お金が目的ではなく、経験したことがない仕事を経験する事や、農業の方々とのふれあいを通じて、自分を高めていくことが目的です。繁忙期の農家や宿泊施設でボラバイトをやってみませんか？ボラバイトを経験することによって、新しい体験・経験をしてみませんか？きっとあなたのいい人生経験になると思います。その中で人と人の触れ合い、やりがいのある仕事を是非試してください。きっと新しい側面が発見できると思います」(「Netボラバイト」HPより抜粋)
- 3) ボランティア活動の理解を進める上で幾つか参考となった事例を紹介しておく。①農学、農業学問の用語としてある「自生植物」は「Volunteer Planet」(英和中辞典、小学館)という。②「敵味方の区別なく」(病院ボランティア) — 1877(明治10)年5月西南の役・田原坂の戦いで、佐賀藩士佐野常民は「敵味方の区別なく救護する団体の設立」訴え、博愛社を設立した。1886(明治19)年11月には、日赤病院(現日赤医療センター)と改称した。③金子郁容はその著書『ボランティア—もうひとつの情報化社会—』(岩波新書、1992年)において、「与えるものが与えられる」「ボランティアは『助けること』と『助けられること』が融合し、誰が与え誰が受け取っているのか、区別することが重要でないと思えるような、不思議な魅力にあふれた関係発見のプロセス」「相互依存性のひ弱さが、実はボランティアの魅力と、力の源泉である」「助けるものが助けられ、与えるものが与えられ、他者のために私のためとなる。そんな相互性と関係性こそボランティアの本質」だと説明している。④車イス障害者が主催するぬくもりの会が発行する『車イスでまわれる京都観光ガイド』(汐文社、1999年)には「人が喜ぶを楽しむ」事が自分のボランティア活動の信条であると記してある
- 4) 創造的な次代への飛躍の動力という観点から「あいまいさ」を論じている文献も少なくない。筆者の手元にも大江健三郎『あいまいな日本の私』(岩波新書、1992年)、尾崎新『対人援助の技法—「曖昧さ」から「柔軟さ・自在さ」へ—』(誠信書房、1997年)、清家洋二『あいまいさの精神病理』(新評論、2002年)、河合隼雄・中沢新一『「あいまい」の知』(岩波書店、2003年)、今田高俊『自己組織性と社会』(東京大学出版会、2005年)、米沢富美子『〈あいまいさ〉を科学する』(岩波書店、2007年)などがある。
- 5) 本研究における、ボランティアの「強み弱み」調査は、筆者が担当する幾つ

かのボランティア教育プログラムに参加した受講生に対して、強み弱みシートを活用し自由記述によって調査したものである。2001年度から2006年度まで継続して行ってきた。

- 6) 小澤亘『ボランティアの文化社会学』（2001年9月、世界思想社）、同『ボランティア文化の国際比較研究』（科学研究費補助金基盤研究（B）報告書）
- 7) 小澤は、ボランティアイメージと関心の相関関係を見ることによって、本人によってさえも意識化されていない「態度の傾向性」、すなわち隠れたボランティア動機を把握することが可能になるとしている。ボランティア主体の動機分析にシフトした分析視角であるが、本研究では、むしろボランティアイメージをフィルターにして現実のボランティア実態に迫ってみようとしている。
- 8) 各因子の詳細は以下の通りである。向上因子：「自分が成長する」「知識や経験が社会に生きる」というイメージが中心で、向上心に関連する因子。援助因子：「自己犠牲」「困った人を助ける」というイメージが中心で、他者援助に関連する因子。面白因子：「楽しい」「遊び感覚」「冒険的な」というイメージが中心で、ボランティアにおける「遊び心」を感じさせる因子。外圧因子：「強制的な」「人気のある」というイメージが中心で、社会・教育制度の直接的強制によるせよ、マスメディアなどの取り上げ方にもとづく社会的な「雰囲気」による間接的影響にせよ、外圧により「やらねばならない」という気持ちに関連する因子。羞恥因子：「恥ずかしい」というイメージに関連する因子。偽善視因子：「偽善的な」「おせっかいな」など、ボランティアに対して批判的な態度に関連する因子。
- 9) 花田えくは「ボランティア拒否宣言」（『すたこらさん』1986年10月号、おおさか行動する障害者応援センター）は、〈ボランティアこそ私の敵／私はボランティアの犬達を拒否する／ボランティアの犬達は私を優しく自滅させる／ボランティアの犬達は私を巧みに甘えさせる〉と強烈な問題提起を行っている。